

康家瓏の《中国語文趣話》

谷 峰 夫*

《Interesting Subjects on Chinese Linguistics》 by Kang Jialong

Mineo Tani*

《Interesting Subjects on Chinese Linguistics》(Yunlong Publishing Company) written by Kang Jialong illustrates fundamental knowledge of Chinese with a lot of vivid examples and valuable suggestions. It may safely be said that this is a standard work of its class, so I think it is worthy of a perusal for those connected with Chinese education. The aim of this paper is to outline the essential features on 19 items of its section I.

Key Words (キーワード)

Kang Jialong (康家瓏), Chinese (漢語), Phonetics(語音学), Semantics (語義学), Chinese ideograms (漢字)

康家瓏(Kang Jialong)は漢語学者として最近頃に国内外で注目を浴びているが、ここでは氏の近著である《中国語文趣話》(雲龍出版社)を取り上げてみたい。本書は基本的な事項を扱いつつも平板に墮することなく、著者の風格の滲み出た含蓄ある筆致がふんだんに盛り込んだ恰好の例えと相俟って一種の新鮮味を醸し出している。正にタイトル通りの興味を引く内容である。其れ故、漢語研究や教育に携わる者が対象を今一度確認する意味で読んでも啓発されることが多く、認識を新たにさせてくれる好著だと信ずる。本書は大きく〈語言篇〉と〈言語篇〉の二つから成るが、ここではそのうちの〈語言篇〉に収められている19の項目についてその触りを紹介したい。

(1) 言語と意思疎通

・言語は人類にとって唯一ではないが最も重要な意思疎通手段である。「手勢」「身勢」「表情」——陳望道は《修辭学發凡》の中でこれらを「態勢語」と呼んでいる——と言った非言語的コミュニケーション手段のもつ意味は大きい、しかしこれらはあくまで補助的なものに過ぎず、言語に取って代わることはできない。シェークスピアは「沈黙の中に言葉があり、ポーズの中に言葉が存在する」と書いていて非言語的コミュニケーションの重要性に言及しているが、然りとてこれが言語そのものに優るというわけではない。

・言語を確実なものにして身に付けておくこととそれをを用いる場を心得ていることは一人の人生を成功に導く鍵となり得るが、その逆の場合は失敗を招くことにもなりかねず、言語に対する姿勢は真摯かつ慎重であらねばならない。西漢の鄒陽の場合は前者の成功例であり、唐代の詩人孟浩然の場合は後者の失敗例である。また、言語に対する知識を豊富に有していることで問題を手際よく処理できることもある。その例としては蔡文姬の《胡笳十八拍》における「拍」をどう解釈するかについて学界では多くの説があったが、郭沫若は豊

*海上保安大学校 (Maritime Safety Academy)
呉大学非常勤講師

富な言語知識を駆使して「拍」は「首」の意であると証明し、この問題を解決してみせた場合を挙げている。

・今や言語研究は言語学自身の境界を突き破り、他の科学領域にまで入り込んでいるのが実情であり、他の科学の発展にとって言語研究の果たす役割には計り知れないものがある。

(2) 言語と符号

・「避諱」とは諱を避けることである。例えば、秦の始皇帝は名が政であったのでこれと形が近くて音が同じ正の字を使った「正月」は「端月」に改められたし、漢の光武帝は劉秀という姓名だったので漢代の人には「秀才」のことを「茂才」と言ったのがそうである。更には、宋の真宗は趙恒という姓名だったことから「姮娥」は「嫦娥」と改められたし、清朝の宣統帝の時には北京の故宮の「宣武門」が「神武門」となったことがそうである。だが、言語は一種の符号に過ぎず、符号とそれが指すものとの間に本来必然性はないわけであるから諱を避けるということは無意味である。

・言語符号は形式（音の符号）と内容（語義）の二つから成る結合体である。これはソシユールの言う酸素と水素から成る水に例えることができ、表と裏から成る紙に例えることができる。シェークスピアはロミオの口を借りて「バラはたとえ名称が変わったとしてもその香しさに変わりはない」と言っているが、言語における音義の結合の任意性は正にこの言葉に示されている通りであり、それが長く使われているうちに習わしとなるのである。

・任意性の産物としての言語符号も人々の実際生活に入るとそれ自体強制力をもつようになり、当初の任意性に誤りがあることが分かってもなおかつ頑固にこの任意性を守り通そうとする。例えば、孟子は「心之官則思」と言っているが、この認識は実際に合わず誤ったものであるにもかかわらず独り歩きして今日でも「心里怎麼想，嘴上就怎麼說。」とか「讀書不用心，老是貪玩。」とか「眉頭一皺計上心來。」のように

用いられているが如きがそうである。

・言語は音、義、語彙及び文法の四つの要素から成るが、これら各要素が連係し合い、対立し合い、区別し合い、制約し合う中で組織だった厳密な体系が形成される。そしてこの体系性は各種の層・級及び縦横に交錯する制約関係として表現されるのである。因みに層は底層と上層から成るが、その底層には音の大小単位と語義の大小単位が含まれ、上層には第一級（語素）・第二級（詞）・第三級（句子）という三つの級が含まれている。

(3) 共通語

・現代漢語の共通語である普通話（普通话）は北京語音を標準音とし、北方語を基礎方言とし、典型的な現代白話文の著作を文法の規範とするものである。

・普通話（普通话）は北方方言を基礎に発展したものであるが、北方方言と同等だと言うわけではなく、一部の語彙を他の方言から吸収したものもある。例えば、福建語から吸収したものに「龍眼」「台風」などがあり、四川語から吸収したものに「搞」「過硬」「要得」などがあり、上海語から吸収したものに「尷尬」「名堂」「水汀」「癩三」「噱頭」などがあるといった具合である。一方、北方方言の中の語彙であまりに卑俗なものは普通話に取り込まれなかった。例えば、「老陽兒」「話匣子」「取燈兒」「嘮叨」「撒丫子」「概拉」「螞蟻」などがそうで、これらは普通話ではそれぞれ「太陽」「留聲機」「火柴」「閑談」「跑」「乱吃」「蜻蜓」となる。また、北京語と普通話（普通话）はしばしば混同されるが、両者は完全に同じだと言うわけではない。いま発音を取り上げた場合、北京語特有の訛りは普通話から排除されている。例えば、北京語にあった「太好了」「不言語」「暖和」「底下」のそれぞれの発音は「tūi hǎo le」「bù yuányi」「nǎnghuo」「dǐxie」となるが、これらは普通話の発音ではない。

・普通話（普通话）を押し広めると言うことは各地に存在する方言を消滅させることと同義ではない。方言には方言の良さがあり、状況によっては普通話で代替できない役割を果たし得るからであり、方言の

もつ価値を抹殺することはできない。作家の李準は〈郷音〉という一文の中で「郷音」（御国ことば）を「親切的」（親しみがあり）、「熱乎乎的」（温かく）、「甜滋滋的」（甘美で）、「沁人心脾的」（深く心に染み込み）、「質樸憨厚的」（飾り気がなく）、「難以忘懷的」（忘れ難く）、「美妙動聽的」（人を引き付ける）と表現しているが、方言のもつこのような側面を積極的に評価しつつ方言と共通語の関係を正しく認識することが必要であり、その上で共通語の発展が図られることが望ましい。

(4) 漢語方言学

・漢語の方言をみてみるとそこには社会的生産生活や文化の様相が色濃く反映されている語があって大変興味を引く。いまそのいくつかを挙げると、

- ①方言の地名詞にその地の生産生活の特徴が反映されている場合。例えば、福建省には「碇」「碇」の付く地名が多く存在するが、これは古代からその地が陶磁器の生産と深く関わっていたことを物語っている。また、福建省平潭県には「礮」の付く地名があるが、この「礮」は石を築き上げ塼状にしたもので潮の満ち引きを利用して漁をするための一種の建造物を意味しており、そこが漁業を生業とする地であることを示している。
- ②所変われば指すものが変わり、生活との密接度が窺える場合。例えば、木炭で暖を取る中国の南の山間部では「炭」と言えば「木炭」を指すが、これが山西省になると「炭」は「木炭」ではなく「煤炭」を指すというように変わる。しかも山西省では「煤炭」が人々の生活に深く入り込んでおり、「笨炭」「希炭」「藍炭」「摺炭」「炭塊」「炭塊塊」の如く細分化をみている。
- ③方言からある地の地形の特徴がみてとれる場合。例えば、台湾には「崙」「垠／坎」「坑」の字が付いた地名が多数存在するが、「崙」は付近の平野部よりやや高い小さな丘を、「垠／坎」は川岸や溪谷の崖に近い場所を、「坑」は山地や丘陵地の小さな谷で水が流れ

ているところをそれぞれ意味しているという具合である。

- ④中国に古くからある陰陽思想が地名に反映されている場合。「陰陽」の「陽」は山の南、水の北を指すが、一方「陰」は山の北、水の南を指す。この知識があれば例えば、衡陽は衡山南部の都市であり、洛陽は洛水の北にある都市だということ、また、華陰は華山の北にあり、淮陰は淮水の南にあるという地理的概況を知ることができる。
 - ⑤方言にその地の文化的側面が反映されている場合。例えば、湖南省岳陽臨湘一帯では親族の呼称に特異な現象がみられ、父も母も「爸」と呼び、祖父も祖母も「爹」と呼ぶ。同様に、兄も姉も「哥哥」であり、弟も妹も「老弟」であり、おじもおばも「細爺」だという具合である。男女の区別がどうしても必要な時に限ってそれぞれの語の前に「大／細」を付けるわけで、その場合父は「大爸」、母は「細爸」のようになる。この現象から男尊女卑の観念がこの地域で極度に強いことが容易に理解できるわけである。
- ・方言からその方言区に住む人々の心理状態を窺うこともできる。例えば、どの方言にもある忌詞を取り上げた場合、甲の地域では忌詞であっても乙の地域ではそうでないということがあるが、これは地域間における人々の心理的な差異だと考えることができる。具体例を示すと、広州では「猪舌」を「猪脷」と言い、「絲瓜」を「勝瓜」と言うが、これは前者にあつては「猪舌」の「舌」と「折本」の「折」が同音であり縁起が悪いのでこれを避けたわけだし、後者にあつては「絲瓜」の「絲」と「輸」の音が近いことからこれもまた縁起がよくないということで忌み嫌ったのである。また、広州語では「空屋」のことを「吉屋」と言うのも「空」と「凶」が同音で不吉であることに由来している。更に別の例を挙げれば、「炒蛋」という語は黒龍江省のある地域にあつては性行為を連想させるためにタブーであるし、「大哥」という語は山東省西南地区ではこの地域から出た尻軽

妻の夫である武太郎を想起させるということで他人が自分を「大哥」と呼ぶのを忌み嫌うという現象がある。

・方言を学習し研究することは古漢語を読む際の手助けとなる。と言うのも方言には古漢語の痕跡を残すものが少なからず存在するからである。例えば、李白の詩の〈遇蓬池隱者〉には「歎息兩客鳥，徘徊吳越間」という句があるが、この中の「客鳥」は古語で現代普通話にはないものである。ところが閩南方言にはこの語がまだ残っており「喜鵲」を指すことが明らかになっている。また、《董西廂・卷三・紅羅襖曲》には「暢好台孩，拳止沒俗態」という件があるが、ここに出て来る「台孩」は李行健の方言調査の結果河北方言にみられる語で「上品なおっとりしたさま」を意味することが確認されている。

・漢語方言学は七大方言区、つまり北方方言区・吳方言区・湘方言区・粵方言区・閩方言区・客家方言区・贛方言区を研究対象とするが、この大方言区の下には「区」が、「区」の下には「片」が、「片」の下には「小片」が、更にその下には最小の単位である方言点があるというように細分化される。また、研究方法からみた場合、「描写方言学」「歴史方言学」「方言地理学」の三つに分けるというのが一般的である。漢語方言の実態は各種の研究によって徐々に解明されてはいるが全体像を把握するまでの道は遠いというのが現状で、未解決の問題は少なくない。

(5) 音節の分析

・漢語の音節の分析法には二通りある。その一つは、音節を声母、韻母、声調の三つの部分に分ける方法である。もう一つは、音節を元音と輔音に分ける方法である。普通話には10の単元音と22の輔音があるが、《漢語拼音方案》にあって6つの字母(a, o, e, i, u, ü)で代表させているものが10の単元音であり、21の声母と後鼻音ngに相当するのが22の輔音ということになる。

・中国の映画芸術の世界で活躍する孫道臨はシャッターを切る時に出演者の映りをよくするために

「茄子(qiézi)」の二字を連呼することになっているが、これは音節の分析が我々の日常生活に活かされている一つの好例だと言える。「茄子」の「茄(qié)」の韻母ieは齊齒呼に属するため発音の際に歯が少し覗くし、「子(zi)」の韻母-i[?]は開口呼に属するため発音の際に上下の唇が平行状態で口元が左右に開くので「茄子」を続けて言うことにより口と歯が顔の表情を生き生きさせる作用を果たすというものである。

(6) 反切拼音法

・清代の小説《鏡花縁》に学をひけらかす老秀才が女性に冷やかされる場面があるが、そこで効果的に用いられているのが反切という方法である。その女性は問いに真つ当な答えが出来ない老秀才を前にしてさながら「問道於盲」だと感ずるが、これをそのまま口にするのではなく、「吳郡大老倚閭滿盈」と言って相手を揶揄しているのであり、反切が巧みに使われている。つまり、「吳郡」「大老」「倚閭」「滿盈」はそれぞれ「問」「道」「於」「盲」の反切だというわけである。

・反切は古人が音を綴る方法として用いたもので、その起源は漢末にまで遡ることができる。具体的には二つの漢字を綴って全く別の漢字の音を示すわけだが、この二つの漢字のことを反切字と言い、先に来る方を反切上字、後に来る方を反切下字と呼んでいる。一方、音を知りたい漢字は被切字と言い、反切上字の声母と反切下字の韻母及び声調を取って被切字の音が示されるという形をとる。

・反切には三つの欠点がある。即ち、①漢字で漢字の音を示すことには限界があるという点。一定量の漢字に対する知識をもっていることが前提になっており、反切上字及び反切下字を知らなければ反切は全く意味をなさないからである。②反切にあっては上字から韻母及び声調を、下字から声母をそれぞれ取り去った後でそれらを繋ぎ合わせるという作業をすることになり、これが結構厄介だという点。③反切上字及び反切下字の字音は古音によるものであり、現代音によるものではないので反切の理解のためには音韻学の知識をもって

いなければならないという点。

(7) 漢字の性質

・象形・指事・会意・形声・転注・仮借を漢字の六書と言うが、このうち表意を形成するのは前の四つである。

・会意の中には実際に反映していないものも見られる。例えば、鹿と牛では行動が素早い点では鹿が牛に優り、体の大きさでは牛が鹿の上をゆくが、字を造る際にはこれが逆になっている。つまり、「犇」という字は‘奔’の意になってしまっているが、本来なら「𧾷」という字こそ‘奔’の意に相応しいと言えるし、「𧾷」という字が‘粗’の意になってしまっているが、本来なら「犇」という字こそ‘粗’の意に相応しいと言える。

・形声字は現在通用している漢字の約90%を占めているのでこれを学習することは大変重要な意味をもつ。この形声字は「形符」（表意成分）と「声符」（表音成分）から成り、純然たる表意のみという点を突破したことで大量の字を造ることに大いなる貢献があった。しかし、形声字の「声符」自身も表意であり、その意味で純粋な表音符号ではないし、形声字の中には「声符」そのものが形声字であるというのがあったり、更にはどの形声字かで同一のものが「声符」になったり「形符」になったりといった具合であり、総じて形声字は表意の枠組みから完全に脱してはいないと言える。

(8) 形声字

・形声字における「形符」で事物の種類・所属が示されるが、これには人間の認識が大いに関係している。ただ、現代人の認識と古代人のそれとが必ずしも一致するとは限らず、ずれや違いがある場合には「形符」の表す意が現代では最早消え失せてしまっていると考えてよい。例えば、「駿」は本来は馬の名であるが、現在では「証験」の意で用いられており、「馬」には既に意味はない。また、「形符」の中には古代人の事物に対する認識の誤りがそっくり反映されていて注意してかからねばならないものもある。例えば、「鯪鯉」（セ

ンザンコウ）については「形符」が「魚」になっているが、これはセンザンコウが魚のような鱗をもっているため古代人がそれを魚類に入れてしまったのだと思われる。もう一つ例を挙げれば、「虹」が虫偏なのは殷代の人々がそれを雨後に現れる龍（龍は蛇に通ず）だと考えたことによるもので、これまた現代人の認識からすれば誤ったものである。

・形声字における「声符」の中には近似音しか表し得ないものもあり、二つのケースが存在する。その一つは声母が同じ「双声」で、もう一つは韻母が同じ「疊韻」である。前者にあつては例えば「杯」という字がそうで、声符の「不」は「杯」と声母 b を共有するといった場合であり、後者にあつては例えば「胡」という字がそうで、声符の「古」は「胡」と韻母 u を共有するといった場合である。ところで、音符の表す古音についてであるが、これは現代音と違っていることが少なくないので注意が必要である。例えば、「江」という字は声符が「工」で、古音にあつては「工」と「江」の声母がともに g だったのが現代普通話では「工」が「江」の声母を表さなくなっているからである。

・形声字の中にはどれが形符でどれが声符か人により認識が異なるものがある。例えば、「錦」という字がそうで、「金」が声符だと言う点は一致しているものの形符については「帛」がそうだとする人と「金」「帛」ともにそうだとする人がいるのである。

・形声字における形符と声符の組み合わせには一定の規律があり、一形一声の場合は6通りの組み合わせ——左形右声・左声右形・上形下声・上声下形・内形外声・内声外形——が存在する。なお、一形一声以外に二形一声や多形一声があるが、ともあれ形声字の形符と声符を正確に認識するには漢字の形の変遷に関する知識を豊かにすることが是非とも必要になってくる。

(9) 正字法

・「錯別字（誤字・当て字）」を書かないために

は字形・字音・字義の三点に注意しなければならない。

・字形については形の似たものが多いので区別する必要がある。例えば、「羸弱」の一字目は「羸」ではないし、「赧然不語」の一字目は「赦」ではない。また、「修葺一新」「草菅人命」の二字目はそれぞれ「葺」「管」ではないので気を付けなければならない。形の似た字を覚えるには順口溜や助記附言法を活用するのも一つの手である。例えば、「戌—戌—戌—戎」を覚える場合は「戌横、戌点、戌空心、戎是一个十字形。」という順口溜を知っていると便利だし、「燥—躁」を覚える場合は「乾燥起火、急躁跺脚。」という助記附言法を活用すると効果的である。

・字音については音の近い字が多いのでこの点注意を要する。特に漢字の中で圧倒的多数を占める形声字についてはその声符が古今で音に変化があり、現代の字音を正確に反映したものでないにも関わらず声符を字音分別の標識にし、それが誤字や当て字を生むことに繋がっているため要注意である。なお、方言との絡みで言えば普通話をしっかり学ぶことも正字を書く上で大変重要である。例えば、広東方言区の人にとっては「無」と「不」を区別しないので、「毫無光彩」や「不難看出」と書くべきところをそれぞれ「毫不光彩」や「無難看出」と書いてしまうし、また、江西省のある方言区においては「最」と「再」を区別しないために「最後一次」とすべきところを「再後一次」としてしまうのがそうであり、これらは普通話のマスターで克服できるところのことである。

・字義に通じていて義の差異に明るいことも誤字や当て字の防止に繋がるが、これには形声字の形符に関する知識も当然含まれる。例えば、「暄」と「喧」の二字を取り上げると、「寒暄」の「暄」は形符が「日」で「温暖」の意であるのに対し、「喧嘩」の「喧」は形符が「口」で「声大きい」の意であるという違いがある。

(10) 語義

・英語の「west wind」と中国語の「西風」とを

等価として捉えることはできない。何故なら前者の「west wind」は英国という地理上の位置関係から温暖で生気を孕む風であるのに対し、後者の「西風」は「昨夜西風凋碧樹」のそれであるからだ。それ故、中国人の「西風」に対する感性及び認識で以て英国人の言う「west wind」を捉えようとするのが如何に間違っているかが分かるというものである。同様に、シェークスピアの《真夏の夜の夢》（中国語では《仲夏之夢》）からも窺い知れるように英国人の描く真夏は爽やかで心地よく薄いセーターを着ることさえあるというものだが、それに対し中国の南の読者が「仲夏」という語から受けるのは武漢や南京の如き情け容赦のない酷暑なのであって、そこには詩的なものが入り込む余地は全く存在しないという違いがある。このような例からも分かるように一つ一つの語の背景になっている言語環境を抜きにしてその語の真の把握はあり得ないのである。

・人間の認識の深まりとともに語義も発展・変化するが、その主たるパターンとしては次の四つがある。

①語義の深化：語義の適用対象は不変であるが、対象の特徴付けに深化がみられる場合。例えば「土」を取り上げると《説文解字》では「地之吐生物者也。」となっているだけであるが、これが《現代漢語詞典》になると「地球表面的一層疎鬆的物質，由各種顆粒状鉍物質、有機物質、水分、空氣、微生物等組成，能生長植物。」というように語義に深化がみられる。

②語義の拡大：ある詞の概括する範囲が広がるか、もしくは原義に新義が加わるといった場合。例えば、「河」「江」は古代においてはそれぞれ「黄河」「長江」を指すのみであったし、「洗」は古くは「足を洗う」を意味するだけであったのが現代ではその範囲が相当に広がっている。また、「尖端」は「とがった端」を原義とするが、現代ではこれに「最も先進的な科学技術」という新義が加わっている。

③語義の縮小：語義の概括範囲が小さくなるか、もしくは語義項目が減少するといった場合。例えば、「学者」はもとは「学ぶ人」であったのが現代では「学術上一定の成果のある人」に狭まっているし、「結婚」は元来「男女が夫婦になる」ことと「国家間で縁戚関係を結ぶ」ことの両方を意味することができたのが現代では前者のみになっている。また、「営業」はもと「民衆の生計」を意味したのが今では経營業務のみに絞られている。

④語義の転移：語義の対象が甲から乙に転じ、転移後の変義が原義との間で類属関係にある場合。例えば、「兵」は古代では「兵器」を意味したのが現代では「軍人・戦士」を指し、「行李」は古くは「両国間を行き来する使者」であったのが今は「外出時に携帯する荷物」になっているというようなケースである。

(11) 語義の曖昧性

・語義の中心部は明確であっても周辺部がぼやけているという場合は少なくない。同一語に対して人により理解のずれが生じるのもこの点に起因している。

・「人々は言語運用の中で言葉の曖昧性の存在を許している」というのはポーランドの Adam Schaff の言であるが、曖昧性を内包する語を多く用いても情報伝達やコミュニケーションが妨げられないのは人間の脳にそれらをうまく処理する機能が組み込まれているからである。

・漢語における「模糊」は「含糊」とは異なり、方向性と明確性を内包しており、「精確」に対して「模糊」なのであって伸縮性・概括性・抽象性を備えている。言語を表層面で捉えた場合明確であっても深層面では「模糊」だということが実際の言語生活では多々あるのである。

・ある言語形式で対象となるべき内容が抜け落ちて語義だけが生きているという現象を語義の遊離と呼んでいるが、音を通して意味だけを理解し、対象の内容まで理解していなくてもコミュニケーションにおいて決定的な問題が生じないのは語義

の遊離がプラスに作用しているからである。

(12) 多義語

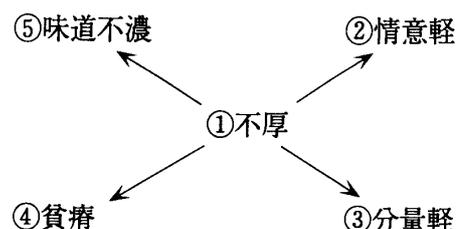
・多義語とは一つの語音形式で多くの関連する義に跨っている詞であり、「打」はその代表例である。ここで注意せねばならないのは、義と義の間に何ら関連性を有しないものは多義語ではないので区別してかからねばならないということである。

・多義語には必ず中心となる義があり、これが義の基礎を為すわけで、他の義はこれから派生したものである。中心となる義は更に本義と基本義の二つに分かれるが、前者は文献上の記載にみられる最初の義であり、後者は現代常用する最も主要な義である。

・中心となる義（本義・基本義）から派生や比喻によって形成される義が転義である。

(a) 派生による場合

〔その1〕中心となる義から放射状に新義が派生するケース。例えば、「薄」がこれに相当し、図示すれば以下のようなになる（①が中心となる義、②～⑤は①からの派生義）。



〔その2〕中心となる義から派生義が生まれ、この派生義から更に別の派生義が生まれるケース。

(2-1) 連鎖状になるもの：例えば、「寒碇」がこれに相当し、図示すれば以下のようなになる（①が中心となる義、②は①からの派生義、③は②からの派生義）。

①醜陋、難看

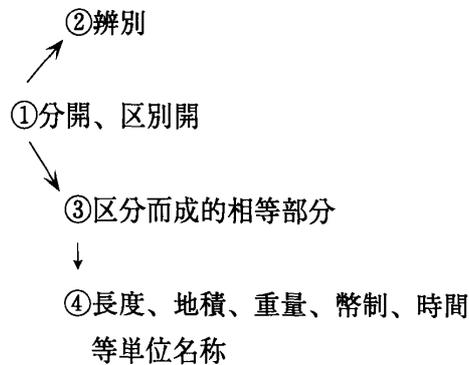
↓

②丟臉、不体面

↓

③譏笑、揭人短处使之失去体面

(2-2) 連鎖状と放射状の結合になるもの：
例えば、「分」がこれに相当し、図示すれば以下のようなになる(①が中心となる義，②及び③は①からの派生義，④は③からの派生義)。



(b) 比喩による場合

事物甲を指す中心義が比喩の働きによって事物乙を指す新義になるケース。例えば、「釘子」が比喩の働きによって「碰釘子」という用い方をされるのはこれに相当する。

(13) 同音異義語

・同音異義語とは音が同じで義が異なる一組の語であり、現代漢語にあっては詞の総数の約10%を占めるといふ林杏光の統計がある。同音異義語は異形同音異義語と同形同音異義語の二種類に分けることができるが、前者にあっては「缺一少十」の「一」と「十」にそれぞれ「衣」と「食」を充てるような例がそうであり、後者にあっては方向とモノの両方を示す「東西」のような例がそうである。ここで一つ注意しておかなければならないのは同形同音異義語は意味的に全く関連性がないという点で多義語とは違うということである。

・同音異義語はその運用面で我々の生活の多方面に浸透しており、ここでその例をいくつか挙げて

みることにする。

〔例1〕客を送別するのに柳の枝を折るという漢代からの風習があるが、これは「柳」と「留」（引き留める）が同音であることによるものである。

〔例2〕北京の人は客をもてなすに梨を出さないが、これは「梨」が「離」に通じると考えることによるものである。

〔例3〕山東の人は婚礼に好んで「紅棗花生」（アカナツメラッカセイ）を贈るが、これは「棗」と「早」が同音で早く子宝に恵まれるよう願ってのことである。

〔例4〕杭州の人はお年寄りの誕生祝いに「鐘」（大きく重い時計）を贈ることを忌み嫌うが、これは「送鐘」が「送終」（人の死を看取る）と同音であることによる。

〔例5〕旧時科挙の試験を受ける者に肉親は「筆、定勝糕、粽子」の三品を贈ったが、これは「筆定糕粽」が「必定高中」と同音であることによる。

〔例6〕刺繍品の中では「蝙蝠」と「鹿」が題材として最も広く取り入れられているが、これは「蝠」と「福」、「鹿」と「禄」がそれぞれ同音であることによる。

〔例7〕香港では家を購入するのに8階や18階のユニットが買えたらたとえ大金を注ぎ込んだとしても割に合うと考えられているが、これは8が「發」（発財につながる）と音が近く、18が「実發」（一定会発財につながる）とこれまた音が近いのでともに縁起がよいからである。

(14) 語義の分析

・事物の複雑に錯綜した様はそのまますも言語にも反映されるが、とりわけ語の個性化につながる側面は言語の基本を成すものであり十分注意して扱う必要がある。例えば、「両目で見える」を取り上げれば、これに相当する漢語としては以下の如きものがあってそれぞれのもつ個性的な側面によりいくつかの区別が可能である。

一般的な見る……看、瞧、瞅、視、過目、看到、
見_到 etc.

遠くを見る……瞻仰、瞻望、仰望、仰視

下を見る……瞰、鳥瞰、俯視、俯瞰

周りを見る……顧盼、張望、回顧、環視、掃視

こっそり見る……覷、窺視、窺探、偵察

気持ちを集中して見る……盯、瞄、注視、監視、
凝視、逼視、矚目

怒りの気持ちで見る……瞪、瞋、瞠、怒視

斜めにして見る……睨、斜視、側目

ちらっと見る……瞟、瞥、瀏覽

くわしく見る……察、察看、觀察、審視、洞察、
打量、端詳

その他特殊な見る……拝見、晋見、接見、召見、
參觀、檢閱、閱覽、博覽、
目撃etc.

・語義は通常次の①～③の面から分析を行う。

①語義の範囲を分析：ここで言う範囲とは語義が概括するところの対象の範囲である。名詞に対してはとりわけこの分析が重要になってくる。例えば、「局面」と「場面」，「時代」と「時期」，「品質」と「品行」，「車両」と「車」のそれぞれにあっては前の語が後の語より範囲が広いというのがそれである。

②語義の軽重を分析：ここで言う軽重とは語義が概括するところの対象における性質・性状面の程度である。動詞・形容詞・副詞に対してはとりわけこの分析が重要になってくる。例えば、「損壞」と「毀壞」，「請求」と「懇求」，「主要」と「首要」，「優良」と「優異」，「幾乎」と「簡直」のそれぞれにあっては前の語が軽く、後の語が重いというのがそれである。

③語義の適応環境を分析：ある語義が別の語義との間で結合関係が築けるかどうかを言う。例えば、「預告」は「天気」や「災情」とは非結合であり、「天気預告」とか「災情預告」とは言わないというのがそれである。また、「青」と「緑」を例にとれば、ともに同じ色を表すにも関わらず山は「青」で、水は「緑」

で形容するし、枝は「青」で、葉は「緑」で形容するのが普通で、その逆は一般的でないというのがそれである。

(15) 語順

・漢語は語形変化をもたぬ非形態言語であり、文法の決め手となるのは語順である。この語順には一定のルールというものがあり、自由に位置を換えることはできないが、時としてある種の語用効果を出すためにこのルールが破られる場合がある。例えば、王之涣の詩《登鸛鵲樓》の中にある一句「黄河入海流」は普通なら「黄河流入海」とすべきところだが、人に訴える効果という点から語順が入れ替わったケースである。

・漢語において普通の語順とは異なったものを生み出す原因としては次の①～③が考えられる。

①思維上の論理的要因による場合：イギリスの科学史家 Needham, Joseph は中国人の弁証法的論理に優れている点を指摘しているが、このことは漢語の語順にも反映されており、普通とは異なる様相を呈する原因になっている。例としては、

「学而不思則罔，思而不学則殆。」

「信言不美，美言不信。」

「難者不会，会者不難。」

「疑人不用，用人不疑。」

を挙げることができる。

②心理的要因による場合：美的感覚が作用したり心理活動が如実に映し出されるケースである。例えば、「電影制片廠」を取り上げると、これは意味からすれば「制電影片廠」とする方がふさわしいのであるが、リズムの点で4 + 1（もしくは1 + 3 + 1）は落ち着きが悪く、2 + 3（もしくは2 + 2 + 1）のリズムになる「電影制片廠」の方がバランスが取れてはるかに口調がよいというわけである。別の例を見てみよう。浩然の《艷陽天》に「鷄不啼了，狗不叫了，孩子不哭了，女人不笑了，人人都像塌了架，丢了魂，一声長嘆接着一声長嘆。」という件があるが、一部と

~~~~部で作者がこのような語順にしたのはそれなりの理由があつてのことであり、それを簡潔に記すと、先ず一部については四字、四字、五字、五字と配して調子を整え、「叫」と「笑」をそれぞれ二番目と四番目にもってきて韻を踏み、「啼」「叫」「哭」「笑」という並びで〈平〉から〈仄〉へという変化を示し災難に遭った人々の気持ちの落ち込みと合致させようとしているのである。また、~~~~部については先に〈仄〉、後に〈平〉というように一部とは逆の並びにしており、文が単調になるのを避ける意図が働いているのである。

- ③情感を要因とする場合：感情の高ぶりは尋常の語順に従った表現を嫌うものである。例えば、「阿明、止歩！」なら普通の表現だが、際疾いところで危険を回避させたいような場合は「止歩！阿明！」と言うが如きである。また、辛棄疾の《摸魚兒》にみられる「更能消幾番風雨？匆匆春又歸去。」という表現も一般の語順を倒置したものであるが、これは政治的に抑圧を受けている作者の憤懣の情が成せるわざで情感を要因としている。

#### (16) 岐義

・岐義とは一つの文に存在する二つ以上の解釈を言うが、これはスムーズなコミュニケーションを妨げ、誤解を招く原因になりやすく、またたとえ誤解に至らなくとも如何に解釈するかで人を不必要に悩ませることになるので避けることが賢明である。

・よく見られる岐義のケースとしては以下のものがある。

- ①文中に多義語が含まれている場合：例えば、「請您告訴我，怎樣開始写作最好？」と尋ねられた作家が「通常是由左往右写。」と答えた場合、決して相手を満足させる答えにはなっていないものかと言って間違つた答えだというわけでもない。これは質問文に「開始」という多義語が含まれていることに起因する。

#### ②文中に多義構造が含まれている場合：

- a. 単文の場合：例えば、「我在這兒睡不好。」という単文は「我||在這兒睡不好。」と分析できるし、「我在這兒睡||不好。」とも分析できる。
- b. 複文の場合：例えば、「妻賢夫事順，子孝父心寬。」という複文は、「妻賢，<sup>(並列)</sup>夫事順；子孝，<sup>(並列)</sup>父心寬。」のように解釈すれば並列複文となるし、また、「妻賢，<sup>(假定)</sup>夫事順；子孝，<sup>(假定)</sup>父心寬。」のように解釈すれば假定複文となる。

・岐義に関しては次の二点に注意することが必要である。

- ④言語環境を絶えず念頭に置き、正確に語を用いること。修飾制限詞が是非欠かせないところではこれを落とさないこと。
- ⑤層次分析法は岐義を見分ける有効な手段となるからこれを大いに活用すること。

#### (17) 文成分の省略

・口頭による場合であれ、書面による場合であれ、言わずとも自明の成分はしばしば省略し言語を簡潔なものにしようとするが、省略に際しては次の二つの条件が満たされなければならない。

- ①文の前後や話の環境を離れては意味がはっきりしないもので、一定の語を補ってはじめて意味するところが明確になること。
- ②補う語が想定でき、しかもそれが一種類しかないこと。

・文成分の省略には二種類ある。その一つは前文で出ているものを後文において省略する〈承前省〉であり、もう一つは後文にすぐ現れるものを前文において省略する〈蒙後省〉である。

・ある種の成分を省略した文と非主述文とは性格が異なり区別してかかる必要がある。非主述文と言うのは、

- (a)上課了！  
 (b)多快呀！  
 (c)好！  
 (d)飛機！

のように詞だけからなる文や主述詞組以外の詞組から成る文である。成分省略文と非主述文については次の①②二つの点に留意しなければならない。

①明確でまとまった意味を表すためには省略文の場合一定の話の環境が必要になるが、非主述文の場合は特定の言語環境を必要としない。

②省略文にあつては省略している主語は明確に想定できるが、非主述文にあつては主語が存在しないか或いは主語を補う必要性が全くない。

・文成分の省略と文成分の欠落は異なるものである。文成分の欠落とは省略条件に合わない省略であり、欠くべからざるものを欠き、意味が通じず、文の誤りを招く現象を言う。文成分の欠落の主たる原因としては以下のものが考えられる。

①介詞や「中」「上」「下」等の乱用により主語が状語に変わってしまい主語の欠落を招いている場合。例えば、

\*経過這次講課，对大家的啓發很大。

\*在這場不大不小的風波中，使我悟出了一個深刻的道理。

がそうであり、下線部を取り去れば正しい文となる。

②文が比較的長く、最初に出現した主語がどうであるかを説明しないまま次の主語に移ってしまい、最初の主語に対する述語の欠落を招いている場合。例えば、

\*他对工作認真負責的態度，同學們都很尊敬他。

という文にあつては「態度」に対する述語が欠落している。

③定語で以て賓語の中心語に代え、それによって賓語の欠落を招いている場合。例えば、

\*由于他長期生活在城市里，再加上父母的溺愛，形成了愛虛榮、怕艱苦。

という文にあつては「愛虛榮、怕艱苦」を定語としてその後に「的思想」が必要なのだが、そうはなっておらず賓語の欠落という誤りを犯している。

## (10) 修飾語

・漢語の文成分にあつて修飾語となるのは定語と状語であり、時間・地点・数量・範囲・性状・材料等の面から中心語を修飾制限するという役割を担う。この修飾語を上手く使いこなすことは概念の明確化にとって非常に重要なことである。

・概念は内包と外延に分けることができ、この二つは相反する関係にある。つまり、内包が増加すれば外延は縮小するし、逆に内包が減少すれば外延は拡大するということになる。例えば、「杯子」は「玻璃杯子」より外延が広く、「玻璃杯子」は「杯子」より内包が増加している。

・中心語に対する修飾制限で注意すべき点を挙げると次の通りである。

①定語、状語が表す属性等は中心語が表す事物と符合せねばならず、過不足があつてはならない。

②修飾語と中心語の間に矛盾があつてはならない。例えば、

\*長期以來，由于注意種草種樹，這裏的風沙災害基本上根除了。

という文にあつては「基本上」という修飾語と「根除」という中心語の間に矛盾があるためこれは正しい文とはならない。

③中心語が表す概念の内包が明らかな場合は無理な修飾語の付加を避けねばならない。例えば、

\*不小心把脚上的脚趾碰破了。

という文にあつては「脚上」が無理な修飾語ということになる。

④修飾語内部の配列順序に注意する必要がある。

いくつかの定語やいくつかの状語が同時に一つの中心語を修飾する場合、それら内部の配列順序に絶対的固定的なものがあるわけではなくて具体的な論理関係で配列が決定されるのであるが、それでも一定の習慣というのがありこれに則ることが必要になってくる。

(i)いくつかの定語が一つの中心語を修飾する場合。例えば、

他 那兩本 新出版的 理論著作 早已寄走了。

という文では中心語<sup>〰</sup>の前に四つの定語があるが、その配列は〔領属〕〔数量〕〔情状〕〔性質〕という順になる。

(ii)いくつかの状語が一つの中心語を修飾する場合。例えば、

在建築工人的辛勤勞動下，圖書館於十月三日  
在中區勝利竣工。

という文では中心語<sup>〰</sup>の前に四つの状語があるが、その配列は〔条件〕〔時間〕〔地点〕〔情状〕という順になる。

### (19) 句読点符号

・句読点符号は文章への貢献度が大きく、言わば「声無き英雄」であってこれを軽視することは文章の生命を絶つに等しい。

・句読点符号を用いることにあまり意を払わない人がいるが、これには句読点符号を重要視していないことの外にその使用方法を把握しておらず誤用しているといったケースが目立つ。

・句読点符号は漢語で「標点符号」と言い、「標号」と「点号」に分けられる。「標号」は詞語のもつ特質をはっきり出すための符号であり、「引号」「括号」「書名号」「專名号」「破折号」「省略号」「着重号」「間隔号」「連接号」の九つがある。一方、「点号」は語句を区切り構造関係や語気を示す符号であり、「句号」「問号」「感嘆号」「頓号」「逗号」「分号」「冒号」の七つがある。

・「標点符号」の用い方は次の順口溜によって覚えておくと便利である。

標号：

引文特殊詞，豆芽上下掀。〔「 』引号〕

文中要注解，兩頭各半弦。〔（ ）括号〕

書報和篇名，像角鑲辺沿。〔〈 〉書名号〕

転折或解釈，一横写後辺。〔—— 破折号〕

意思没說完，六点緊相連。〔……省略号〕

特別着重處，字下加圓点。〔・着重号〕

書名和篇名，圓点插中間。〔・間隔号〕

兩詞成整体，詞間短横牽。〔-連接号〕

人、地、朝代名、底下画短線。〔\_專名号〕

点号：

一句話說完，劃個小圓圈。〔。句号〕

疑問與發問，耳環耳下見。〔？問号〕

命令與歡呼，滴水下屋檐。〔！感嘆号〕

句中要停頓，豆芽後辺添。〔，逗号〕

並列詞語間，点上瓜子点。〔、頓号〕

並列句子間，圓点豆芽墊。〔；分号〕

總括提示時，兩点黑圓点。〔：冒号〕

・「標点符号」を記す位置は次の順口溜によって覚えておくと便利である。

句、逗、問、嘆、分、頓、冒，一律不在行頭標。

括号、引号、書名号，

「前半」不在行尾掉，

「後半」不往行頭跑。

破折、連接、專名與省略，

最怕割断半中腰。

有疑問詞非問句，

後面不可用問号。

引語中插「某某說」，

「說」後用逗不用冒，

「某某說」後是轉述，

「說」後也不用冒号。

— 完 —